



「心」を鍛える

学校法人四天王寺学園
理事長

南谷 恵敬

本年4月に理事長に就任いたしました南谷でございます。よろしくお願いいたします。

皆さんにおかれては、新型コロナウイルス流行の続く中、今でも不安な日々を送られているのではないかと察します。この2年、足掛け3年の間、本来あるべき十分な学習環境やクラブ活動がかなりの部分制限され、満足できる学習生活が送れなかったのではないかと想像します。

さて、入学式でお話したことなのですが、近年、社会経済情勢を示す言葉として、V (Volatility: 変動性)、U (Uncertainty: 不確実性)、C (Complexity: 複雑性)、A (Ambiguity: 曖昧性) の四つ、頭文字をとってVUCA (ブーカ) と呼ばれる概念が挙げられています。これらの言葉にあるとおり、ロシアのウクライナ侵攻などを例として、世界の国々の先行きが不透明であり、新型コロナウイルスの流行や地球温暖化に伴う気候変動や異常気象、さらに先進国を襲う少子高齢化など深刻な問題

が多発しています。このような現実の中で我々はどうのよう生きていけばいいのでしょうか。

まず、テクノロジーの理解と情報収集力。つまりテクノロジーを駆使して危機に際して常に先を考える能力を身につけることです。二つ目は、自らの頭で考えること。これは人間にしかできない未知の課題の解決や人間の感性に基づく創造的なアイデアなど生み出せる力を高めていくということです。三つ目に、ポータブルスキルの獲得。これはいわば「基礎能力」の獲得のことで、論理的思考力やプレゼンススキル、コミュニケーション能力、交渉力などを身につけることです。そして、これらの能力の根底に「人間力」ともいうべき、人を思いやる心、忍耐力、怠らない心、そして人と和する心などが無ければ本物の力とはなりません。そして、この「人間力」の獲得に関しては仏教の教えや修行が大きな力を発揮します。聖徳太子は、「行善の義はもと帰依にあり」すなわち、「善を完成するにはその根本に仏への帰依がなければならない」とされました。

また、六世紀の高僧天台大師智顛は「智目行足 到清涼池」、つまり「智慧の目、修行の足を以って初めて清涼な池、つまり悟りに到ることができる」と言いました。知識だけではだめでそこに仏教に根差した行動が無ければよい成果は得られないということです。先進的な技術や知識が偏重される現代、その根底にある「心」をもっと見つめ鍛えるべき時と考えます。



「自分を知る」ということ

四天王寺大学・四天王寺大学短期大学部
学長

須原 祥二

去年亡くなられたプロ野球の名監督だった野村克也さんは、選手の人間教育にも力を入れた方でした。その著作の中に、例えば「この世にオギャーと生まれてきたときから、人間何らかの才能を持っている」とか「平均的な人間になるより、自分にしかない光るものを身につけ、それを磨くべきである」とかいう名言があります。

野村さんは、他球団でクビになった選手に新たな役割を与え復活させることが上手で、「野村再生工場」との異名をとりました。これらの名言からは、そのことが鮮やかに思い出されます。

学生のみなさんは、大学での学びやクラスやサークルの活動、その他大学外のさまざまな場面で、自分自身の欠

点を思い知らされたことがあるでしょう。そうした場合、欠点を克服する努力はもちろん大切ですが、そんなに簡単に克服できるものではありません。すでに20年ほど人生を歩んできたみなさんの個性は簡単には変わらないからです。

じゃあどうすればいいのか——欠点が目立たない、長所を生かせる場所で勝負すればいい、そのように頭を切り替えるべきだ——野村さんはそのように言っているのです。

ではあらためて、みなさんは自分自身の短所と長所をすぐにあげられますか？

「自分を知る」なんて月並みな言葉でしょうが、そのことを実践するのは大変難しいことです。他人に自分の欠点を指摘されたら、普通は頭にきて冷静に受け止められなかったり、ひたすら落ち込んで自分の長所を見失ってしまったりするからです。

でも、これからの人生で自分という人間をできるだけ生かしたいのなら、さまざまな経験を通して自分を客観視しながら、自分の短所があまり問題にならない、長所の生きる場所を探す努力をしていただきたいと思います。自分の進路に迷っている人は参考にしてください。

❖ 学園訓「和」について

人文社会学部長
日本学科 教授
矢羽野 隆男



四天王寺学園は、大正11年(1922)聖徳太子御遠忌1300年を記念して創立され、今年100周年を迎えました。この伝統ある学園の教育の基本方針が「学園訓」です。聖徳太子の「十七条憲法」に基づき、学生・生徒が実践しやすい徳目が設定されました。

第一条が学園訓の「和」に対応します。第一条を見てみましょう。冒頭に有名な「和を以て貴しと爲し」を掲げ、「上和らぎ、下睦びて、事を論ずるに諧わば、則ち事理自ら通ず、何事か成らざらん」(上下みな「和」の心でよくコミュニケーションをとれば、おのずと道理が通じ、何事も成しとげられる)と結びます。憲法の最初に和の理想を謳っているのです。和は中国古典でも貴ぶ徳目ですが、和を「皆が心がける最も大切なこと」と特別に位置づけるのは十七条憲法ならではです。和を重んじる日本文化の根源といえるでしょう。

続く第二条は「篤く三寶(=三宝)を敬え。三寶とは佛(=仏)・法・僧なり」これは理想に到る方法です。「三宝」とは、真理に目覚めた人(仏=仏陀)、仏陀の説かれた教え(法)、仏陀の教えを学ぶ者の集まり(僧=僧伽)をいい、この仏・法・僧の三宝を敬うことによって和の理想に至ろうというのです。ちなみに、仏陀の教えを学ぶ者の集団を古代インド語で「samgha サンガ」といいました。僧伽はサンガという発音を漢字で写した言葉で、サンガの意味を漢字で表すと「和合衆(和合する集団)」となります。学園訓に「和」を掲げる四天王寺大学の学生、そして教員・職員は、いわばサンガ・和合衆といえましょう。

ところで、先に「『和』を重んじる日本文化」と記しました。「和」は日本文化全体を代表する言葉で、和服・和食・和室のようにも使います。ただ現代の生活ではいずれも身近なものとはいえません。「和を重んじる日本文化」を大切にしているのか自信が揺らぎます。

そんな我々に「自信を失わなくてもいいよ」と教えてくれるのが、長谷川権『和の思想』(中公新書、2009年)です。「[和室・和食・和服が「和」なのではなく]異質なもののなごやかな共存こそが、この国で古くから和と呼ばれてきたものなのである。」「[日本文化は海外に由来し]もし、日本独自のものがあるとすれば、和の力こそがそれだろう。」伝統として定着した形が「和」の本質なのではなく、「異質なもののなごやかな共存」の在り方が日本独自の「和」の力だといえます。日本文化の特色は、純粹培養ではなく、様々な文化を受け入れ、和やかに和えて別の価値あるものに再構成する在り方にあるようです。

「異質なもののなごやかな共存」という和の本質は、和という漢

字自体にも表現されています。漢字はもともと絵文字に始まり(象形字)、漢字の形には物の形をもとにした「意味を表す部分」(意符)があり、また意味とはあまり関係のない「音を表す部分」(声符)が組み合わさった字もあります(形声字)。基本的には意符が部首と呼ばれる部分になります。

では「和」の部首はどこでしょう。「禾」のようですが、実は「口」です。「禾」はワ・カという音を表す声符です。「和」の原義(もとの意味)は口から発する声を合せず、合唱して異質・多様な音が全体で調和することです。また、「和」には「飡」「盃」といった異体字(字形のバリエーション)があります。意味・発音は同じだけれども字形が異なる字です。では飡・盃のそれぞれの意符「龠」「皿」は何でしょう。龠は「何本もの管・パイプを束ねた楽器(笙、パンフルート)の形で、様々な管が発する和音・ハーモニー」が原義。また、皿は「料理を盛るお皿」の形で、料理は様々な食材や調味料から作られるので、様々な多様な味の調和が原義です。「和」「飡」「盃」の原義を通して見ると、「異質・多様なものの全体的な調和」という意味で共通しています。

楽器(音楽)や料理は、まさに「和」の具体的なイメージです。中国古典に次のような言葉があります。「五種の味が和して美味しい料理となり、音階が和して美しい音楽となる。水で水に味付けしたものを誰が食べるか。同じ音ばかり出す琴を誰が聴くか。同質のものばかりでは何も生まれない。」(『春秋左氏伝』昭公二十年、『国語』鄭語より)同質の集まりは表面的には対立がなくて良さそうですが、全てを一色で塗りつぶした同質は似非・偽物の和です。異質・多様性の排除は発展がなく衰退に向かう、古典はそう教えています。

さて、四天王寺大学・同短期大学部で「和」とともに重んじるのが「利他」の心です。「利他」とは自己犠牲という一方向のものではなく、「自利利他(自ら利し他を利する)」「自行化他(自ら行い他を化する)」ともいいます。「自利」とは、我利我利亡者の我利(利己心)とは違い「自らの善さの実現に努める」こと、「利他」は「自らの善さを他者の為に発揮する」ことです。「自利利他」は、仏の教えをこの世で実践する菩薩の行い(菩薩行)です。

和とは異質・多様なものの全体の調和でした。我々は顔がみな違うように、それぞれ異質・多様な存在です。そんな我々一人一人が自らの善さの実現に努め、さらに様々な他者との関係において自分の善さを発揮して全体の調和を図るのが「和」の在り方です。それは自己の善さを高め、他者の為になる「自利利他の菩薩行」に通じます。

「しあわせ」という日本語の語源は、「為ることを合わせる、行為を仕合う」ことだそうです。人は人との関係において幸せを感じるという我々の心性が窺えます。「和」「自利利他(利他)」の心は、自他を高め活かしあい、幸せを得る心の持ち方といえそうです。大学は様々な人の集合体です。「和」の精神の実践を意識し、様々な場に参加して多くの人と交流し、自他の善さを高め合い、本学の学生らしい充実した時間を過ごしてほしいと願います。

「ウパーヤ」学生編集員募集！！

本学の仏教教育広報誌「ウパーヤ」の紙面作りに参加していただける学生編集員を募集しています。仏教、寺院、仏像、巡礼、歴史、日本文化などに興味のある方、また取材や記事の執筆に関心のある方ならどなたでも歓迎します。当然、学部学科専攻も問いません。

これまで第4面の「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」の取材記事の執筆、およびその取材見学の様子をホームページに掲載するなどの活動をしてきました。また、本学が仏

教教育の一環として実施している野中寺での座禅会に参加し、その実施状況をレポートしていただくこともあります。

興味のある方、詳しい話を聞きたいという方は、第4面下に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究者にお声を掛けてください。

ご連絡お待ちしております。(中田 貴真)



第21回 卒業生インタビュー

話し手: 松原 未来 (まつばら みく) 大阪市立松虫中学校 教諭 (英語)
平成31年3月 人文社会学部国際キャリア学科 卒業
聞き手: 坂本 光徳 (和の精神I 講師、人文社会学部人間福祉学科専任講師、本欄編集)

仕事について

卒業してからは、現在も務めている松虫中学校で英語の教諭をしていて、今年は4年目になります。1年生から3年生まで副担任を順に務めて、今年は1年生の担任をしています。

昔と異なり、今の英語教育はコミュニケーションがメインとなり、英語を学ぶというより、英語を使うに重きをおいています。私はニュージーランドに留学したこともあるので、そこでの経験や感じたことを話しながら、知らない世界がまだまだ広がっていることに気づき、関心をもってもらうような工夫をしながら授業をしています。

今年初めて担任をしていますが、毎日が一瞬で終わります。急に喧嘩が始まるといったハプニングもありますが、新しい発見もあります。子どもの知らない一面や、子ども同士の関係の変化などを直接見たり、気づいたり出来ます。また他の先生から授業内での様子を聞き、それらをクラスの皆に伝えて、喜びあうこともあり、日々対応に追われていますが、毎日楽しく過ごしています。

新型コロナの影響で3か月以上休校した時期がありました。その期間が長くて、コミュニケーションが苦手になった子どもがいました。また今は、体育の時間などはマスクを外すことになっているのですが、そこでマスクを外すことに抵抗がある子どもも出てきています。顔を見ることができなかつたり、人間関係が苦手だつたりと、そのような子どもが増えたので、新型コロナの代償は大きかったと感じます。

英語を教えていることもあり、発音を口の形で見せながら教えたいし、生徒の口元も確認したいのですが、それも難しかったりします。一時期は発音そのものが制限されていたのですが、今はマスク越しでも発音をしてお互いに話すことが可能となったので、段々と制限が緩和されていることを喜ばしく感じます。

和の精神(礼拝)について

最初に5分ぐらいの講話があり、その後には礼拝が始まる際のタイミングで全体が引き締まる印象があります。その空気の切り替わる感じが好きでした。また、先生も全員出席していたことから四天王寺大学が大事にしている授業だと感じていました。お経を唱えたり、聖歌を歌ったりなど他の大学ではできないことなので、それらに触れることが出来たのは、良い経験となりました。

瞑想のことを、中学では黙想と言っているのですが、集会を始める前に行います。また日常でも待ち時間が生じた時など「黙想」と指示して静かに待つという時間があります。何も考えずに静かに過ごすという時間が、一日の中で数分間でもあれば、気持ちを落ち着かせることも出来ます。今も中学で行っていることもあり、大学時代に瞑想の時間があつたことは自分にとって必要なことだったと考えています。

また3回生の時、ラオスにインターンシップに行つて国際交流した

ことを和の精神の授業でプレゼンテーションしたことがあります。皆の前で発表することも好きだったし、自分も受けた授業において聞くほうではなくて、伝える方になったということは嬉しい経験でした。

学園訓について

学生時代は、学園訓として意識することは無かったのですが、「誠実を旨とせよ」は、学生時代も仕事をしている今も心がけています。任された仕事やするべき事などに責任を持ってやり遂げたいと思っています。それは当たり前なことではあるけれども、どこまで責任を持つかなどは自分次第になるので、毎日繰り返し仕事があるけれども、何気なく過ごすのではなく、日々精一杯に誠実に生きようというのは、自分の中でずっと決めてやっています。

次に「和を以て貴しとなす」についてです。学校の教育現場でも、1クラス30人以上がいる中でお互いに調和して上手くやっていくことは、集団生活の中で非常に大切なこととなります。その中で、色々と揉めたり、ぶつかったりすることもあるけれど、自分にも相手にも正直に向き合い、時間がかかってもお互いに理解していくことが大切だとクラスでは良く話しています。

また自分は一人で生きているわけではなく、周りの人に支えられて生きているので、その人たちと感謝を伝えあい、また受け取ったものの恩返しを自分からしていくということも話しています。

大学時代から誠実に頑張っていたし、卒業してからも皆で和について話すことも多く、自分の中では学園訓というのは凄く大切な教えだと捉えています。

在学生へのアドバイス

私の大学4年間は、毎日時間が足りないぐらい充実していました。様々なプログラムやプロジェクト、Jump-Start Englishやインターンシップなどに参加をして、多くの先生と話すこともできて、日々学ぶことで溢れていました。

大学生生活は自分次第でどのようにも変えることができます。何気なく日々を過ごすこともできるけど、四天王寺大学には色々なプログラムがあり、成長できる機会に溢れています。それらのチャンスを無駄にせず、また様々な経験を持つ先生方から話を聞き、知識や教養を増やして欲しいです。私自身も大学時代のそれらの経験は、自分の財産になったので、皆さんにもしっかりと有効活用して大学生生活を過ごして欲しいと思います。



令和4年度 夏学期「和の精神I」講話題目

- | | |
|--|--|
| 4月14日 藤谷 厚生先生「受講ころえー授業規律に関して / 礼拝説明」
坂本 光徳先生「授戒オリエンテーション」 | 6月2日 中田 貴真先生「学園訓—礼儀について—」 |
| 4月21日 須原 祥二学長「『建学の精神(聖徳太子と和の精神)』について」
藤谷 厚生先生「『ウバーヤ』について」 | 6月9日 奥羽 充規先生「学園訓—誠実について—」 |
| 4月28日 坂本 光徳先生「読経概論・瞑想—心を整える楽しみ—」
伊達 由実先生「大学生生活の心得」 | 6月16日 矢野野 隆男先生「学園訓—和について—」 |
| 5月12日 杉中 康平先生「和の精神」を学ぶ意義「学修ポートフォリオの目標設定について」 | 6月23日 仲谷 和記先生「コロナ禍 感染予防について」 |
| 5月19日 藤谷 厚生先生「四天王寺学園、建学の歴史」 | 6月30日 南谷 美保先生「仏像を知ろう」 |
| 5月26日 成田 由岐子先生「学生生活とリスク社会について～犯罪に巻き込まれない、起こさないために～」 | 7月7日 原 祐子先生「『聖歌』について」 |
| | 7月14日 奥羽 充規先生 & 学生有志「グローバル教育研修と和の精神」 |
| | 7月21日 高橋 麻起子課員「薬物乱用と薬物依存を防ぐために」 |
| | 7月28日 杉中 康平先生「学修ポートフォリオの記録について」
藤谷 厚生先生「夏学期を終えるにあたって」 |

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

一 四天王寺（大阪市天王寺区） 一

本学の母体で、聖徳太子によって建立された日本最古の官寺です。創刊号（2012年）以来、2度目の訪問となります。四天王寺の境内に入ってみると、天王寺の街の賑わいも、うってかわって静寂で厳かな雰囲気（おこそ）に包まれます。あべのハルカスと並んで見えるのが不思議な感じですが、



四天王寺とあべのハルカス

私たちが行ったのは、四天王寺の西側の石鳥居です。石鳥居には「釈迦如来 転法輪処 当極楽土 東門中心」（お釈迦様が説法を説く所であり、ここが極楽の東門の中心である）と書いた額がかけられています。四天王寺は、極楽浄土への入り口と考えられ、天皇から庶民まで広く信仰を集めました。また、四天王寺は周りより少し高い位置（上町台地）にあるために、その昔、ここからは西側にあった海に沈む夕陽を見ることができました。そのため、ここは夕陽が沈む様子を西方の浄土を思っで見つめる修行である「日想観」の格好の地でした。天王寺区夕陽丘町という地名もその夕陽に由来します。



石鳥居

大陸から瀬戸内海を通して、日本にやって来た使者たちも、今の大阪湾に入るときに四天王寺を目にしたと考えられます。四天王寺の中心伽藍（中門、五重塔、金堂、講堂）が大阪湾からみ

て、横並びに一直線に並んでいるのは、仏教後進国だった日本でも立派なお寺を造ることができることを使者たちに示すためだったかもしれません。度重なる戦火や災害に見舞われる中で、その大部分は焼失してしまいましたが、戦後、火に強い鉄筋コンクリートで再建されました。「コンクリート造のお寺？」と思われるかもしれませんが、繊細で複雑な建築様式をコンクリートで再現するのは至難の業です。飛鳥様式と近代技術との融合が評価されて、今年2022年に国の登録有形文化財に登録されました。



結縁柱と結縁綱

中心伽藍の五重塔、金堂、講堂は五色の綱で結ばれていました。これは今しか見ることのできない光景です*。今年には聖徳太子が亡くなられて1400回忌という節目の年です。「五色の綱」は結縁綱（けちえんづな）といって、境内に立てられた柱（けちえんばしら）と各堂内の仏様、そして聖霊院の聖徳太子像とを結んでいます。この柱に触れることで綱を通じて聖徳太子やさまざまな仏様とご縁を結ぶことができるわけです。

今回のように、聖徳太子や、四天王寺にまつわる歴史的背景、地理、建築様式を知ったうえで参拝してみると、さまざまな発見があります。今年2022年は、聖徳太子1400年御聖忌、また四天王寺学園創立100周年を迎えた記念すべき年です。ぜひ皆さんも四天王寺に足を運んでみてください。

（岡本麻絢・山本ちひろ）

*取材時には見ることができましたが、令和3年10月から令和4年6月まで行われた御聖忌法要が終わり、結縁柱・綱は現在は取り外されています。

取材に際し、四天王寺勸学部文化財係の渡邊慶一郎様に懇切なご説明をいただきました。ここに記して深くお礼申し上げます。

仏教のことば

退屈

コロナ禍での自粛生活で、趣味や外出などの楽しみが制限され、退屈に感じる人も多いのではないかと思います。この退屈も実は仏教のことばなのです。退屈ということばは、一般的には「することがなくて暇である」、「つまらない」、といった意味で使われますが、仏教では「仏道修行の厳しさに耐えきれず、取り組み続ける気力が減退すること」を意味する仏教用語です。

インドの古いことばであるサンスクリット語の kheda（ケーダ）〈な

まけてだらしなげな様子〉や hiyamāna（ヒーヤマーナ）〈捨てられつつあること〉の訳語とされています。

悟りを求め、人々を救おうと修行を重ねる菩薩の修行中にも、三つの退屈があるとされます。一つには悟りを求めることはあまりにも広大で非常に奥深いために起きる退屈、二つには修行の世界は限りなく、終わりが無いために起きる退屈、三つには修行による悟りによって得られるすぐれた結果を明確にするのが難しいために起きる退屈で、これらを返け、乗り越えることを三錬磨（さんれんま）といいます。

私たちは退屈というと周りの人々や環境によるものと考えますが、仏教では全ての物事には実体がなく、私たちの感情も自らの心の働きにより生じると捉えます。どんな物事でも退屈と思うかどうかは自分次第であり、それにしっかりと向き合う姿勢が大切であるというわけです。（上續宏道）

編集後記

本学園、四天王寺学園は、聖徳太子御聖忌1300年を迎えた大正11年（1922年）、聖徳太子の敬田院事業のご精神を継承する学校として、吉田源應大僧正により設立されたものです。

それから、幾多の歴史を刻み、今年創立100周年を迎えることとなりました。その間、短期大学は昭和32年に、大学は昭和42年に開設され、今日に至っています。

本学園で過ごす数年の日々は、人生100年時代と言われる今日では、あつという間のことかもしれません。しかし、そのわずか数年のうちに、学び得ることのできるものは、数えきれないとも言えるでしょう。本学園で過ごした数多くの卒業生が、社会の第一線でまさに八面六臂の活躍をしてくれていることを見ても明らかであると言えます。

私たちは、「和の精神」を核とした本学の学びを、尚一層大切にしながら、これからも日々の歩みを絶やすことなく、精進していこうではありませんか。（杉中 康平）

研究員紹介

所長 須原 祥二（学長・教授）

主任研究員 藤谷 厚生（教授）

研究員

上續 宏道（教授） 南谷 美保（教授）
矢羽野 隆男（教授） 杉中 康平（教授）
奥羽 充規（准教授） 李 美子（准教授）
坂本 光徳（専任講師） 中田 貴真（専任講師）
上野 舞斗（助教）

客員研究員 桃尾 幸順

UPAYA（ウパーヤ）21号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

令和4年9月1日発行

発行 四天王寺大学

仏教文化研究所 仏教教育センター

所在地 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1

TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-9940

URL:http://www.shitennoji.ac.jp/

「UPAYA(ウパーヤ)」に関する
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。
[E-mail] bukken@shitennoji.ac.jp
(件名は「ウパーヤ」としてください)

